



Title	スペイン語テキスト・ファイルの作成とファイル型式の変換
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 1990, 15, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スペイン語テキスト・ファイルの作成と ファイル型式の変換

出口 厚 実

0. はじめに

前稿（出口1989）でパーソナルコンピュータ上のデータとしてスペイン語を編集したり，加工・処理するときに生じる様々な問題のうちのいくつかを取り上げた。その後，非英欧文のように特殊記号を伴うテキストデータの操作環境を改善するのに役立ちそうなユーティリティが二、三発表されたこともあり，改めて補足を加えるべきところも出て来た。本稿の前半は出口（1989）を承け，スペイン語入力環境の整備に関する具体的な方策を再検討する。第2節ではこれらの方式で作成される異種ファイル間の変換や，現に流通中の他型式ファイル（ワープロ用のものを含めて）との互換性を，特にスペイン語表記法（代字↔実字の翻字方式）に的を絞って考察する。今後，さらに様々な翻字案によるスペイン語文書が出現することも予想されるが，基本的な書式転換のツールを準備しておけば，各自で適宜必要な部分を順応させることで容易に対応できるはずである。ここでは，利用者独自（あるいは現有）のテキスト記法を維持しながら，機械可読テキストの自由な交流と蓄積を妨げない現実的な対処法を目指すことにする。

1. ユーザフォントの可能性

NEC 9800シリーズのパソコン（以下PC98と略す）では，ユーザ自身が半角文字を定義したり，また好みに合ったフォントセットを選択・新作するのが難しく，たとえ可能であってもテキスト画面では利用できないこ

とを既に指摘した。グラフィックモードの下で、敢えてスペイン語実字をディスプレイに表示しても処理スピード低下や他のアプリケーションソフトとの共存に支障を来すことがわかった。ところが、この困難を部分的に克服する2種のPDSソフトが新たに公表され、試用する機会を得た。そこで、その紹介とこれらと共用できるエディタの使い勝手について気付いた点を記しておきたい。一つはSIM (IBM BIOS シミュレータ) で、もう一つはやや遅れて、今春、通信ネット上で展開された“フォント・プロジェクト”の基軸プログラム My Font と附属 utility である。どちらも非英欧文を扱い易くする目的で案出されたわけではないので、我々がかかえているテキスト作成の諸問題が直に解決するのではないが、その糸口となるべき方向を示している。

1.1. SIM 上でのスペイン語テキスト

SIM は IBM-PC(XT, AT) 用に流通しているソフトを PC98 上で実行するためのプログラムである。SIM を PC98 (機種による制限がある) の MS-DOS に常駐させると、SIM 用に個別にパッチ当てされた IBM-PC 用のアプリケーションプログラムがほぼ完全に走行するという画期的なものであった。IBM 社のパソコンやその互換機ではスペイン語などの diacritic 付文字、及び ñ などが正規コード化されているため、拙稿(1989)で指摘した PC98 と国内各社の MS-DOS 機につきものの多くの難点は元々存在しないか、あるいはずっと軽微な程度であった。もし SIM の環境が PC-DOS と同等互換をもたらすのならば非常に有難いのだが、残念ながら SIM により OS が等しくなるわけではない。あくまで個別プログラムを診断して走行条件を擬似的に整えるが、ハードウェア仕様の制約のためにエミュレートできない部分も残るようである。

まず、SIM を常駐させたのち^{注1}、IBM コンパチモードにするためのフォントファイルを置き、フォント設定プログラム fset.com を実行すると、拡張グラフィックス文字がコンソールで表示可能な状態になる。このうち、スペイン語の書字に該当するのは下記のコード (十進数) を持つ15種の記号である。

(1)

129	ü	144	É	158	Pt	161	í
130	é	154	Û	160	á	162	ó

163	ú	165	Ñ	167	o	173	i
164	n	166	a	168	í		

上の記号セットでは通常のスเปน語正書法に必要な強勢符付大文字母音 Á Í Ó Ú が足りない (cf. 出口1989, p. 3)。しかし、米国を中心に世界中に最も広く普及している機種・OSが前記の範囲の字種をベースにしている実状を考慮するならば、そこで作られるテキストファイルとの間で、そのまま相互利用ができるのは大きな前進とみななければならないだろう。また、キーボード上の既存の記号、% # * & , … をスเปน語用文字に読み換える代字方式と異なり、128以降のコード領域が使われるため、前述の非英記号が本来どおりの価値を失わず、表示もされるので好都合である。

Advanced Bits 等のグラフィックスモードを介在させる方式の最大の弱点である、画面表示と動作速度一般の低速化を SIM はかなり回避することに成功している。すなわち、ユーザ定義用漢字領域を半角文字に流用するという巧妙な手法のお蔭で、テキスト画面の高速性を犠牲にせずに(1)などの諸記号が使えるのである。ただし IBM compatible font 表示と漢字表示とは同時に両立できず、いずれか一方のモードを選択しなければならない。モード切換えはアプリケーションの動作中でも割り込めるので、欧文文章を扱う場合にのみ compatible mode にし、それ以外は漢字表示モードに設定しておくことも可能である。

SIM の DOS モードでは、例えば á を入力したいとき、GRAPH (ALT の代わり) キーとコード 160 の数字 3 桁を続けて押すという煩わしい 4 ストロークとなる。ところで、このエミュレータの大きな利点 (というよりも開発の動機そのものであろうが) は流通中の IBM ソフトの一部を動作させ得ることである。IBM 用のエディタ等が使えて、またスเปน語をスムーズに入力できるならば、懸案の大きな障害の一つが解消できるかも知れないので実際に確かめてみることにした。

SIM と共に使用できるオンラインソフトとしてエディタ QEDIT, EDWIN, SE, BLACK BEARED, NEW YORK EDIT や、ワープロの GALAXY, NEW YORK WORD, アウトラインプロセッサとして有名な PC-OUTLINE などがあり、これらに対する修正差分ファイルも通信ネットワークで提供されている。このうち QEDIT(ver. 2.06), EDWIN(ver. 1.5c), GALAXY(ver. 2.41) を実験的に使用してみたが^{注2}、いずれもオリジナル

の状態では(1)の特殊文字を入力しやすくする配慮はなかった。プログラムのソースリストを作成するという本務からすれば当然で、ワープロも外国語文を大規模に編集する便宜まで計られていない。しかし、編集に関わる諸機能は充実しており、特に起動時間の短かさと読み込み・書き戻しの高速性は大きなファイルを取り扱うテキストデータベースの作成にとって有利である。Mix Editor (cf. 出口1989, p.7) にあるような Transkey による任意のキー割当て変更はサポートされていないが、3つのソフトともマクロを備えているので、この機能を借りてスペイン語特殊字母の入力がある程度効率よく出来そうである。

QEDIT の場合、設定しようとする一連のキーをキーボードマクロとして入力実行してから、マクロのライブラリーファイルに落して保存し必要に応じて呼び出す方式と、configuration を行なうプログラム qconfig.exe を起動して定義データを組み込む方法とがある。設定可能な機能キーは制限されているので、頻度の高い強勢符付き母音 á, é, í … には小指の使いやすい GRAPH + a, e, i … を割り当てるのが順当であろう。これに伴い、既定で指定済みの各種のコマンドを移動しなければならなくなるが、筆者は(2)のような対応を configuration file に組み込んでみた。その結果、この設定で西文テキストがこのエディタでかなりスムーズに扱い得ることが確められた。

(2)

```
@ a  macro-begin "á"      /  macro-begin "¿"
@ e  macro-begin "é"      '  macro-begin "ü"
@ i  macro-begin "í"      ^[ macro-begin "Ñ"
@ o  macro-begin "ó"      ^] macro-begin "ñ"
@ u  macro-begin "ú"
@ l  macro-begin "ì"
*注 @は GRAPH キーを
    ^は Cntrl キーを表わす。
```

また、右マージの桁設定が 0～300 の範囲で可能で、ワードラップの ON/OFF もプルダウンメニューから簡単に切り換えられるなど、操作方法はわかり易く特に不便はない。

EDWIN Editor は QEDIT に較べると初心者向きではないような第一印象を与える。各種の編集機能は完備しており、桁設定やワードラップな

どのテキストプロセシングのための配慮もなされている。ただ、コマンド操作はほとんどが Function Key・Control/Alt key の組み合わせに基いており、メニュー選択は用意されていない。Alt + コード数字で á, é, ó, etc. のアクセント付文字を入力できるものの、やはり任意の連続キーに変更することができず、附属のマクロを利用して入力方法を工夫する必要がある。QEDIT と同様、キーボードマクロを Macro-file として一括登録するやり方と、configuration data として組み込む方法の両様が可能である。ただし試用したソフトではインストール用プログラム edwinst. exe の SIM 用パッチに不具合があるようで完全に作動せず、後者によるマクロは確認できなかった。前者の方式で Alt + 3 桁の 4 stroke を Alt + 数字の 2 stroke に短縮できたが、数字キーの位置が遠く打ちづらい。この点では QEDIT のように Alt + 母音字の方が憶えやすく、入力も効率的であろう。

GALAXY はワードプロセッサとして、前 2 種のエディタにはない justification, 英文 spell checker, etc. さまざまな付加機能も具えていて、メニューによる操作手順もわかり易い。ただし、ユーザ側のマクロ定義やキー割付けの柔軟性には乏しいようである。EDWIN と同じく、Alt + 0~9 数字の 10 種類しかマクロ設定用のキーがない。

1.2. My Font

IBM のエミュレート・モードだけでなく、PC98 の MS-DOS のテキスト画面でも半角文字のフォントを簡単に変更できる新たなユーティリティ My Font^{注3}が今春発表された。ローマン・ゴシック・イタリック・ボールドなど好みに応じた書体でディスプレイ上の文字を表示したいという欲求から生まれたプログラムではあるが、別の理由から異形字の表示法を求める我々の要望にも叶うものとなった。

MS-DOS の標準画面出力命令を介さない市販エディタや商用ワープロの中では設定フォントが無効になるものの、My Font を常駐させたままでこれらを使用できるのは便利である。また、ビットマップ式と同種ソフトと比較すると、フォント変更が有効なアプリケーションソフトの数は相当多い模様である。もっとも PC98 の DOS で使用する場合、ASCII コード 20h~70h の英数記号の範囲にしか新定義フォントを表示できず、カタ

カナ領域を借用する便法もとれない。á, í, ú 等を使うためには何らかの代字を犠牲に供さねばならない。全角文字と同時平行表示ができるので、SIM 走行時には得られない merit もある反面、欧文文章のみを編集する際には必須とは言えない漢字の表示と引き換えに、10余りの記号が使用不能となるのは多少窮屈である。テキスト入力以外の作業の中で\$, @, ¥, & などの記号が特殊な意味を帯びることも多く、My Font を解除または一時停止させてから、このような操作に移る必要が起こるからである。

幸いなことに、市販エディタを My Font 常駐状態で動作させるよう改造する方法が発表され、このエディタのキー割当てがかなり自由であるために代替キーの選定に当って、順序よく並び記憶しやすかつ打鍵しやすい位置の文字を被代字にしなければならないという難しい基準を満さなくてもよいようになった (cf. 次節1.3.)。すなわち、非英字記号の中から通常の文章テキストで最も使われにくいものを目安とするだけで足りる。一例として、翻字テーブル(3)に基いたフォント・ファイル Sp98.fot を作成してみた^{注4}。

(3) Sp98.fot の代字対応

実字 / 代字		実字 / 代字	
á	#	ü	]
é	%	Û	/
í	'	ñ	~
ó	&	Ñ	—
ú	\$	¿	@
Á	{	¡	
É	}		
Í	[		
Ó	=		
Ú	+		

上表の割当てと出口(1989, p. 6)との相違は Ü→¥, I→<, u→^ を取り止めて, ¥, <, ^ 3 字を被代替候補から外した点である。<と>には引用符号 comillas の代用品としての用途があり、そのまま残しておくか、《 》に書き換える方がよさそうである。¥ (あるいは Back slash の \) はディレクトリの識別記号としてファイルのパス名に頻出するし、また ^ はエデ

イタの Help 画面中のコマンド指示で Control キーを表現するのに多用されるので混乱を避けるべきだろうと考えた。

1.3. VZ Editor と My Font

1989年5月にPC98用として新しいスクリーンエディタ VZ Editor^{注5}が登場した。高速スクロール、常駐モード、自由度の高いカスタマイズ可能性、柔軟なマクロ言語など数々の優れた特長をもちながら廉価で発売されたため、たちまち脚光を浴び多数のユーザを獲得しそうな気配である。一般的な編集環境の向上はスペイン語テキスト作成にとって歓迎されるべきなのは勿論であるが、ことに、ユーザマクロ機能を活用すると懸案の特殊字の処理が楽になり有難い。例えば、STX型式のスペイン語 Text を入力する場合、アクセント符号 ' は Shift キーと遠い位置の数字キー⑦を押さねばならない。しかも強勢母音の頻度は文章入力スピード全体に影響するほど高い。そこで筆者は下記のマクロプログラムを定義ファイルに置き、タイプライタやワープロソフトで慣れた Dead key + 母音字の感覚で a', e', A' などを入力できるようにした。

(4)

```

*M
51 [ESC]Z "西文入力モード"
    ?.
    (yy)?{yy-, &m("西文 OFF") &q .}
    yy+,
    &m("西文入力モード")
    fa-,
:A    &p c=r, (c=='@' && fa==0 )? {fa+,>A} ? { &o(c) }
    &f(c,"aeiouAEIOU")
    (r>=0 && fa)? { &o($27) >B}
    ((c=='n' || c=='N') && fa)? { '~' >B }
:B    fa-,
    >A

*
    
```

統一を計るため n~, N~ に対しても母音後の single quote と同じ第1キー@を死鍵に設定しているが、利用者が自分流に再定義することができる。

Dead key の@をもし実字として入力したければ、このキーを2度続けて押し下げればよい。また誤って n, N 以外の子音の前で@を押したときは無視されるように配慮している。なお、このマクロではキー入力の監視を行なっているために、同種のマクロ (p. ej. 桁設定によるワードラップ) などと同時に実行できず、それらと合併した新たなマクロを合成する必要がある。

前節で取り上げた My Font の独自フォント表示は通常の VZ editor の編集画面では効かないが、この点をカバーするエディタ本体の改造法が公表された。ユーザ自身がその修正版を作成せねばならないが、高機能エディタでの自由書体を望む者にとっては朗報であった。エディタの市販パッケージにはソースコードが付属しており、通信ネットや雑誌^{注6}で発表された差分リストに従ってソースを修正追加して全モジュールをアセンブルし直すと My Font に対応する新しい VZ editor の実行ファイルが出来上がる。

このフォント版 VZ で前節(3)の換字に基づくフォントセット Sp98 を使用する場合に、スペイン語特殊文字の入力を容易にするためのマクロを作成して、予め vz.def に登録することにした (cf. (5))。STX の Key assignment と共通の方が望ましいので、(4)と同様@を Dead key とし先行打鍵し、その後に母音または n, N が続けばアクセント付母音や ñ, Ñ が画面上に表示されることにする。Û と ü を表示するには~に続けて U, u を入力する。勿論、実際にコードとしてファイルに記録されるのは(4)の #, %, &, ' などの元字である。

(5) Sp98 フォントでの西文入力マクロ

*M

```
52 [ESC]Y "西文フォントモード"
    ?.
    (y)? {y-, &m("西文フォント OFF") &q .}
    y+, &m("西文フォントモード")
    fa-, fb-,
```

```

:A      &p c=r,
        (c=='@' && fa==0)? {fa+,>A}
        (c=='~' && fb==0)? {fb+,>A}
        (fa)?? >B
        &f(c,"aeiounAEIOUN")
        q=r,
        (q== -1)? {fa-, >Z}
        (q)? { (cc=='#') (cc=='%') (cc=$27) (cc=='&') (cc=='$')
        (cc=='~') (cc=='{') (cc=='}') (cc=='[') (cc=='=') (cc=='+' )
        (cc=='_') }
        &o(cc) fa-, >A
:B      (fb)?? >Z
        (c=='u')? { ']' fb-, >A }
        (c=='U')? { '/' fb-, >A }
        fb-,
:Z      &o(c) >A

```

*

上記のマクロを実行中でもキーボードからの英字入力やカーソル移動に目立ったスピード低下は感じられず、ページング・画面スクロールはこのマクロと無関係に機能するので、VZ の機動性（そしてセールスポイントのスムーズスクロールも）は健在である。恐らくスペイン語を扱い得るどの商用ワープロソフトよりも軽快な編集環境と言っても過言でないだろう。

2. 異形式ファイルの互換

パソコン上のスペイン語テキストの表記法に関して、前稿と本稿で異なる形式をいくつか検討した。筆者は当分の間、そのうちで次の3つの形のファイルを併用して行こうと考えている。

(6) i) STX 形式 (cf. 出口1989, p. 8)

ii) IBM 形式

iii) My Font 上の Sp 98 フォント方式

i) の STX の設定経緯や各記号のコード割り当て方の根拠は出口(1989)で触れた。特別なツールを必要とせず、MS-DOS を OS とする全機種で制約なく使える汎用の表記体系はやはり必要であり、その一例として位置づけている。拡張 ASCIIコードを使用する ii) は§1.1. 表(1)以外にもスペイン語に欲しい記号《 》なども含まれていて、最も望ましい形式の1つであるが、É 以外の強勢大文字母音が欠けている。スペイン・中南米で標準機の地位を確立していると言われる IBM 社製パソコンとその互換機上で作成されるデータとファイル互換性があるということはテキスト処理の

観点から重視されなければならないポイントでもあろう。

最後に、ユーザ定義の半角文字セットを使用可能にする My Font と VZ エディタを組み合わせた実字表示方式は、従来のこの種のツールの欠点の多くを解決した操作性の優れたもので、実用に耐え得ると思われる。

現在、異機種や異なる OS を前提にした記録媒体の互換性が必ずしも良好でなく、文章テキストの流通を妨げる一因となっている。既存の様々な流儀の文字読み換え方式とは別に、STXに加えて、またここで2種のテキスト・フォーマットを推奨するのは、さらに混乱に輪を掛けるだけだという批判が向けられるかも知れない。コード体系や記号価値については強力な規約が合意されるのが望ましいのは言うまでもない。しかし、現行 JIS コードや ASCII がスペイン語その他の諸外国語の表記に適合した合理的なものに改められる見込みは薄い。従って、テキスト・データの作成者が少なくとも一文書を通じて統一基準を守っているならば、何種類かの型式を併用・混用するのは止むを得ないのではないかと思う。データを広く交流させるためにむしろ大事なことは、自己のテキスト形式を相手方のものに、あるいはその逆にすばやく変換できるかどうかの問題ではないだろうか。変換ツールを常備しておけば表記法の違いはさほどの障壁にはなり得ないし、種々の様式のテキストと接する中からより優れた形式を模索することもできよう。MS-DOS のテキスト・ファイルである限り、手持ちのワープロ / エディタの置換機能で表記型式を変更できるから、個別の変換ユーティリティが必須なわけではない。ただし、10余の文字を逐次操作で繰り返し置き変えるのは相当煩わしい。たいていのエディタ（及び1部のワープロ）で用意されている一括置換マクロ用の書式に合わせて、変換テーブルを準備しておけばより能率的である。また、ストリームエディタ SED のような utility を利用する方法も手っ取り早く、一々エディタで文書を読み込まなくても済む。以下では(6)の各ファイル間の差異を吸収し流通を円滑にするためのファイル変換法の実例をいくつか紹介しておこう。

(7)は STX 形式の MS-DOS テキスト・ファイルを前出の Sp98 フォント用のファイルに変換するための SED Script File の記述例である。逆方向の変換は各行で中間 slash の前後の文字を入れ換えたスクリプトを書けば同様に処理できる。

(7) # Convert STX to SP98

```

s/a' /#/g
s/e' /%/g
s/i' /'/g
s/o' /¥&/g
s/u' /¥$/g
s/A' /{/g
s/E' /}/g
s/I' /¥[/g
s/O' /=/g
s/U' /+/g
s/n~/~/g
s/N~/_/g
s/u¥^/¥]/g
s/U¥^/¥//g
    
```

テキストの編集を終え文書をセーブした後に、エディタを終了する前に別型式のファイルとしても保存しておきたくることがよく起こる。そこで、VZ用に編集集中のテキストをそのまま変換してしまう2種類のマクロコード(8)を作ってみた。処理速度がかなり遅いので長文テキストのコンバートに適さないが、他のプログラムを必要とせず、わずかのキー操作でエディタ内で即座に実行できるし、また結果も確められるので、定義ファイルの1部に組み込んで用いれば便利であろう。

(8)

```

*M
55 [ESC]Y "Covert SP98 to STX "
    ?. &s
    &a("SP98 フォント用ファイルから STX 形式に変換します")
    (r<=0)? { &d .}
    &m("処理中")
    #^ #<
:A    &f(cd,"$%'&#{}[=+~_^/")
    q=r,
    (q== -1)? { #d >Z }
    (q)>? { (jj='u') (jj='e') (jj='i') (jj='o') (jj='a')
    (jj='A') (jj='E') (jj='I') (jj='O') (jj='U') (jj='n')
    (jj='N') (jj='u') (jj='U') }
    (q<10)? {c=$27, >B}
    (q<12)? {c='~', >B}
    (q<14)? c='^',
:B    #g &o(jj) &o(c) >Z
:Z    (ct==0)? >X ? >A
:X    &m("コンバート完了!!")
    &d .
    
```

```

56 [ESC]V "Convert STX to SP98 "
    ?. &s
    &a("STX形式からSP98 Font用ファイルに変換します")
    (r<=0)? .
    &m("処 理 中 ")
    #^ #<
:A    (cd==$27)? >B
      (cd=='~')? >C
      (cd=='^')? >D
      >Z
:B    #s
      &f(cd,"aeiouAEIOU")
      q=r,
      (q==--1)? >Z
      (q)>? { (c='#') (c='%') (c=$27) (c='&') (c='$')
              (c='{') (c=}')' (c='[') (c='=') (c='+') } >E
:C    #s
      (cd=='n')? { c='~', } ? { c='_', } >E
:D    #s
      (cd=='u')? { c='^', } ? { c='/', } >E
:E    #g #g &o(c)
:Z    #d (r<0)? >X ? >A
:X    &m("コ ン バ ー ト 完 了 !!")
      &d .
*
```

マクロ No.55を指定した方は、現在カーソルがある文書を SP98 font 形式から STX へ変更する。マクロ No.56はその逆の変換を行うためのものである。なお、スペイン語フォントを表示した状態で前者を実行すると変換は正しく行われても、出力画面は当然、通常の STX 表記と異なり、例えば、i' は ii' のようになる。被代替字の '% # ... etc. が含まれていると対応のスペイン語特殊字母に表示されてしまうため、My Font の表示を停止又は解除したモードで処理する方が無難である。

次に SED により STX 形式のテキストを IBM の書式へ変換する script を (9) に示す。

(9)

```
# Convert STX text to IBM-PC text
```

```
s/¥([AEIOU]¥)' /¥1/g
```

```
s/a'/á/g
```

```
s/i'/í/g
```

```
s/u'/ú/g
```

```
s/e'/é/g
```

```
s/o'/ó/g
```

```
s/u^/ü/g
```

```
s/U^/Û/g
```

```
s/n~/ñ/g
```

```
s/N~/N/g
s/@/¿/g
s/¡/!/g
```

上記は SIM 常駐モードで IBM 用のエディタで作成し、実行も SIM 上で行なう必要がある。なお、アクセント付大文字を IBM テキストにおいても母音 + single quote として保持したいときは(9)の 1 行目を削除すればよい。また、2 行目以下の対応文字を前後入れ換えれば逆方向の IBM→STX の文書変換が可能である。

その他、市販のワープロソフトで作成されるスペイン語テキストとの互換性もある程度確保しておく方が望ましいだろう。特に、テキストを整形した文書としてプリントするには既存のワープロの印刷機能に便乗するのが手軽で、また他の用途への応用が楽であるからである。KOA Technomate のテキスト出力文書は各国語フォントの原字を回復できるように工夫されている。従って STX 形式との間の相互コンバートは前述の SED を用いて簡単に行えるはずである。双方向変換のための 2 つの Script file を下記に示す。

(10) a. STX → Technomate テキスト

```
s/@/]/g
s/¥([aeiouAEIOU]¥)'/_ _¥1@/g
s/¥([uU]¥)^/_ _¥1~/g
s/n~/¥¥/g
s/!/___>/g
s/N~/!/g
```

b. Technomate テキスト → STX

```
s/_ _¥([aeiouAEIOU]¥)@/¥1'/g
s/_ _¥([uU]¥)~/¥1^/g
s/]/@/g
s/¥¥/n~/g
s/!/N~/g
s/___>/!/g
```

3. おわりに

スペイン語の研究、教育の広い分野にわたってパソコンが有益であるという認識は徐々に一般化して来ている。その一方、パソコンの具体的な利

用法や日常の取扱いをめぐる細部についての情報は以外に少ない。限定された特殊な目的のためにコンピュータの価値を十分引き出そうとするのはかなり手間のかかることと覚悟せねばならないかもしれない。しかし、多数の人々にとって共通の基盤部分であるはずの“スペイン語文章資料の処理法”といった面においても、各人が白紙の状態からスタートとしてそれぞれ独自の方法を切り開いて使用環境を整備して行かねばならないのであろうか？ スペイン語のテキスト処理を実際に行おうとして気づいたのは、文字の入力法・表記形式などの基礎的な事柄で疑問やハードルに行き当たったとき、従来どのようにして解決が計られて来たかや実践的なテクニックに関する情報がほとんど利用不可能なことであった。恐らく、何らかの方策・ルーチンが編み出され、負担軽減のためのツールや小プログラムによって打開されているにちがいないと思われる小さな障害も、あれこれ悩んだあげく棚上げにしなければならなかったり、結局は自分で新たな抜け道を見つけるのに時間をとられるというようなことが再三あった。

小稿には、スペイン語のテキスト処理に関して筆者が経験した不満・不便を少しでも緩和できるような実用情報が思いつくままに寄せ集められているだけであるが、これから同様な作業を試みようとする人々に益する所があれば幸いである。今後、パーソナルコンピュータを利用した研究は増々盛んになるであろうが、その成果のみが発表されるのではなく、それを導くのに用いられたデータと共に、その手順、プログラムコード、付随した Knowhow (実務上の示唆・提案を含む) が他者にも利用できるよう公表され、同じような分野で研究を進める人々が無駄な重合を避け時間資源を節約できるような協力体制が生まれることを期待したい。

(1989年12月22日)

〔 注 〕

1. 筆者が使用したのは SIM10F. ARC (88/8/12) として提供されているセットに含まれた sim. com である。
2. 実際に作動させた version は PC-VAN の SIG, NEC98 by CIARI を通じて入手したものである。その後、バージョンアップされているものもある模様で、機能・操作性が一部異なっているかもしれない。
3. 現在、筆者の利用しているのは Ver. 1.26 (sept 21, 1989) である。
4. フォントエディタとしては中尾幹彦氏によるプログラム FONTED2 (ver 2.08/1989, 3.28) が便利で、編集済の何種類かのフォントセットと共にオンラインソフトとして入手可能である。

5. 発売元は(株)ビレッジセンターで, ver. 1.00 と ver. 1.01 が出回っている。89年12月中の version up が予告されている。
6. 『The Basic』誌1989年12月号, pp.22-32, Micky「98のフォントを取り換えませんか?」。筆者が利用したのは NEC98 by CIARI のプログラマーズ PDS からダウンロードした VZ & myf.lzh に含まれた差分情報である。

Reference

出口厚実 (1989) : スペイン語テキスト・データとパーソナルコンピュータの使用環境
 —— *Estudios Hispánicos* 14, 1-13